



澤寬全集八

海舟  
下

編集委員 司馬遼太郎 尾崎秀樹

講談社

子母澤寬全集 8



勝海舟(下)

昭和四十八年五月二十四日 第一刷発行  
昭和四十八年十一月十日 第五刷発行

著者 子母澤寬

装幀者 辻村益朗

発行者 野間省一

発行所 株式会社 講談社

東京都文京区音羽二―十二―二十一 郵便番号一―一二

電話 東京(〇三)九四五 二二 大代表 振替 東京三九三〇

印刷所 凸版印刷株式会社

製本所 株式会社若林製本工場

一一〇〇円

落丁本・乱丁本はおとりかえ致します

© 梅谷龍一 1973

0393-251585-2253 (0) (全)

子母澤寬全集第八卷

目次

## 第五卷 江戸開城

|      |    |
|------|----|
| 河童   | 二  |
| 衣更着  | 三〇 |
| 野焼   | 元  |
| 壺の中  | 三八 |
| 丁字花  | 四八 |
| 一つの灯 | 五八 |
| 大用現前 | 六七 |
| 雜然騒然 | 七七 |

|      |     |
|------|-----|
| 絶言語  | 八七  |
| 天下掌中 | 九七  |
| 面やつれ | 一〇六 |
| 目と目  | 一二六 |
| 一朵の雲 | 一二六 |
| 天道不違 | 一三六 |
| 諸天及人 | 一四六 |
| 地中の火 | 一五五 |
| 清濁   | 一六六 |

|                           |     |
|---------------------------|-----|
| 別れ路                       | 一七六 |
| 任天知                       | 一八六 |
| 一嘆の声                      | 一九五 |
| この一つ                      | 二〇五 |
| 野の人                       | 二一五 |
| 鵲蚌 <small>いづはう</small> の悔 | 二二五 |
| 卯月                        | 二三四 |
| 陽光                        | 二四四 |
| 無辜大災                      | 二五四 |

散る花咲く花……………二六四

## 第六卷 明治新政

兎戯……………二七四

葱坊主 ねぎぼうず……………二八三

不容他欺 たのあやむきをいねず……………二九三

仏心鬼心……………三〇三

夜霧……………三一

念頭滅却……………三二

|                             |     |
|-----------------------------|-----|
| 運命                          | 三三〇 |
| 飢餓                          | 三四〇 |
| 奔流の中に                       | 三五〇 |
| 東京                          | 三六〇 |
| 夏花散る                        | 三六九 |
| 清風濁風                        | 三七九 |
| 秋の風                         | 三八九 |
| 命数                          | 三九八 |
| 葛紅葉<br><small>つたもみじ</small> | 四〇八 |

波……………四二七

雪見燈籠……………四二七

霜夜……………四三七

歸雁……………四四七

心胸坦易……………四五六

枯野……………四六五

捨ぶね……………四七五

弦月……………四八五

向柳原……………四九五

夜泣蕎麦よなきそば……………五〇四

高槻村たかつきむら……………五二三

冬ざれて……………五二三

梅もどき……………五三三

雷同……………五四二

添え書……………五一

解説・尾崎秀樹……………五五三

勝夢酔・海舟年譜……………五五八

付 勝海舟関係写真Ⅱ写真・榊原和夫

・中谷吉隆

勝  
海  
舟  
(下)



## 第五卷 江戸開城

### 河童

海軍総裁の稲葉兵部少輔もやめた。陸軍総裁の松平縫殿頭もやめた。二人とも立派な人だが、結局はお大名だ。それに代るに旗本を以てした事は、勝の氣にいった。新たな諸役について、また一文句も二た文句もありそうなどころをなんとも云わず、雨の中を悠々と元氷川へかえつて来た。

「こんだあ、陸軍総裁だとうよう」

第一番に夫人へそういって、

「河童が陸へ上つて人をたぶらかそうというんだ。どうせ、てっぺんのお皿の水を引っかき廻されて生捕だろうよ」

「いろいろ御苦勞様に存じます。でも、海の事も、陸の事も、御奉公の道には変りのないことでございますようから」

夫人は、にこにこ顔である。

「おや、お前もそんな事をいうかえ。おいら、お城で、その一言で、思い返して引受けて来たよ。藤沢志摩守が、そんな事を云つてさ」

「左様でございましたか。それはそれは」

「ほんに、叶わねえねえ」

それからお茶一ぱい飲む間もなかった。柳營からの使者で、来る二十六日、仏蘭西のロセス公使が、新役拝命の人達へ面謁のことを申出ている、当日は早晩を以て登城するようにとの達しが来た。

「ロセスというあ蛇だねえ、うるさく、ねばねばとからみつきやがる」

勝は、やがて、夫人の出してくれる朝の膳までの間、老母堂のお居間へ行つていた。忙しきにかまけて、こここのころずいぶん久しくお目にもかからない。

老母堂は、勝を見ると共に、涙がすうーとと臉に一ぱいになった。

「お前瘦せましたねえ。何処か悪いかえ」

「いいえ、一こうに健やかでございますが」

「可哀そうにひどく瘦せましたよ」

涙がぼたりと頬へつたうのが勝の目についた。

「父上があのように、どちらかといえば瘦せたお方ですから、あたしも、年をとるにつれて、段々似て参るのでしょう。中風の筋のものは瘦せるがいいと云う故、この方が結構でんす」

「でもお前は、瘦せたばかりか、減法疲れて居りますよ。」

色も悪く眼の光も鈍く——」

「さよでんすか」

「いろいろな世の中も大変とやというが、お前は、今、何御役を勤めて居りますか」

勝は、近頃、御役の事は、一切母上のお耳には入れぬようにと、家中へ厳しくいつてある。だから軍艦奉行も海軍奉行も、御存じがない。

\*

今日の五千石も、明日はどうなるか知れない今の時勢、そんな泡のようなことに、母上を喜ばせたり、また忽ちにして悲しませたりすることは、痛わしいと思うからである。

「只今のところ陸軍総裁と申します御役ですが、実は、その日その日のことのわからぬ世の態<sup>まゝ</sup>でして」

「陸軍総裁——御役高は？」

「七千石です」

「え？」

母上は、まるで自分の耳を疑ってでもいるように、激しく首をふりながら、

「いくら？ え、いくら？」

「七千石でございます」

「七、七、七千石——」

母上は暫く、それ以上に口も利けないようであったが、急に、わっと大きな声をあげて、そこへうつ伏した。そのうつ伏したまま、ずっと就いていられる床を這い下って、

両手をびったりと胸の前に合掌すると、幾度も幾度も、大きな声で泣きながら、頭を下げた。

「も、勿体ない、勿体ない」

「お母上、何をなさるのです」

「よくまあお前——」

「そんな事をなさっては、おからだにさわります。さ、どうか」

勝は、立って、母上を抱くようにして、また床へ戻した。四十俵の小倅から、七千石の御大身。母上には、それが現実とは思われなかっただろう。そして、そこにいるその七千石の倅を拝まずにはいられなかっただろう。

母上の涙はいつ迄も止まなかった。

「小吉どのが、御番入をしたさに苦しいお金の工面をしては、まだ夜の明けない中から、麴町の御支配へ日参なされたことがあります。本所の入江町からねえ。それもお金がつづかず、とうとう駄目で、その後は、いっそう放埒をなさいましたが、思えばお気の毒なお方でありました。がねえ、麟や、小吉どのが御番入をしたいと願われたのは御自分のためばかりではないのですよ、小普請<sup>こふし</sup>でいては麟太郎の立身が出来ないとおっしゃってねえ。その小吉どのお心は遂げられなかったが、お前、お前は、まあ七千石の——七千石のお身分に。小吉どのが、草葉の蔭でどのように」

麟太郎は、沈黙したまうなずいていた。こうした母上の喜びも、一瞬後にはどうなるかわからない今の有様。喜

びが大きければ大きいだけに、また御免にでもなったら、  
どのように悲しまれるかを思うと、気軽に七千石をお告げ  
して終ったことが、果して良かったか悪かったか、勝は、  
何かしら背中をすうーっと冷たいものが流れ落ちて行くよ  
うな気がした。

＊

ロセスが新任諸役との面接の日は、青々と晴れて、なん  
となく春が何処かで呼んでいるような暖い日であった。

その斜めに射込む朝日の光を半身に受けて、ロセスは、  
ひどく上機嫌で、人々へお世辞をいって握手をして廻っ  
た。ただそれだけのほんの通り一遍の面接である。

すでに恢復再挙のことは、將軍から断られている。それ  
をなおこの上に、おいらどもに逢いてえたあどんな肚か。

勝は、ふふんと鼻っ先で笑ったような面つきをしている  
と、ロセスは、ちらりとそれを見て、ぐいと力をこめて手  
を握りながら、

「勝さん、後でシャノワン少佐と逢って下さい」

と、勝の仏頂面とはあべこべに、愛嬌を一ぱい漂わせた。  
別にこれと云って纏った話のある筈もなく、面接はそれ  
で終ったが、同時に、会計副總裁の成島大隅守が、勝へ顔  
を寄せるように近づいて、

「ロセス公使がシャノワン少佐と、是非、勝さんを逢わせ  
てくれと頼んでいました、お逢いなさいますか」  
と囁いた。

「別に損耗の立つ事もねえでしょう、逢いやんしょうか」

「では、後刻役所へつれて行きます」

「シャノワン少佐たあ滅法懇意だというからあんな同席願  
い度いねえ」

「承知しました」

「シャノワンの妾は別嬪だとねえ」

勝がこんなところで出しぬけに、そんな事を云ったの  
で、流石の大隅守も、いささかびくりして、眉をよせな  
がら、え？ と、まじまじ顔を見た。

「お倉とかいったねえ、巷の奴らあ將軍お倉とかいって  
るそうじゃあねえかえ」

大隅守には、少し冷たい色があった。

「別嬪ですな。何しろ上様の御声がかかりという馬鹿な噂が  
立っている位ですから」

大隅守は、以前騎兵奉行を勤めた。自然、伝習教官の長  
シャノワン歩兵少佐とは、懇意だ。のち明治六年、大隅守  
の柳北先生は、仏蘭西へ行った時、巴里で少佐と逢って  
いる。

旧識シャノワン氏を訪ヒ、往年ノ友誼ヲ謝シ、始メテ其  
内室ニ面ス。氏ノ書室ニ、余が嘗ツテ贈リシ日本刀一腰  
及ビ江戸名所図繪ヲ置ケリ、且ツ余及ビ荊妻ノ写真モ亦  
此ノ写真帳ニ挿ミテアリ、此ノ旧情ヲ忘レザル、寔ニ感  
嘆ニ堪ヘタリ。我ガ邦人ニシテ故旧ヲ視ル路人ノ如キ者  
夥シ、豈慚愧セザルヲ得ンヤ。

柳北先生は、こうその「航西日乗」に書く程の親しさ  
だ。

「お倉って奴あ、シャノワンを内からつついて、いろいろこっちの御政道向のことに迄口を入れてるてえじゃあねえかえ」

「さあ、知りませんな」

「毛唐人は、女に甘めえから、今度は妾の世話をする時あそのつもりで人選りに気をつけなくちゃあならねえねえ」

お倉は、日本橋の相当な商人の娘だ。これを日本国のためだとかなんとかいって妾に口説いたのは大隅守だなどという噂があった。元より嘘だろうが、勝は、これを皮肉ったのかも知れない。

それから半刻ばかり経っていた。シャノワン少佐は、陸軍総裁の役所で、勝と向い合って腰を下している。大隅守も横で、その長い顎を撫でていたし、騎兵大尉ジュ・ブスケーも傍にいた。

勝は、

「少佐は、回陽艦で、薩艦攻撃の指揮をなされたそうなんです、どんな塩梅でありましたか」

いきなり、こう口を切った。大隅守は、如何にも吃驚した表情でぐいと、身を反らせた。シャノワンの眼は、ちらりと、大隅守を見、ブスケーを見た。そして、暫くして静かに、

「御旗本は強い、勇敢です。わたしは、感じました」

といった。

実は、シャノワン少佐が、大阪を出帆帰東したあの日の

回陽艦に軍事顧問の格で乗っていたことが第一非常な秘密であった。まして、洋上薩摩の艦に出逢って、これを砲撃した指揮をとったなどということは、決して外へもれない筈である。これを勝が知っていた。

「戦さには、必ず勝つ人達です」

「さよですんか。あたしらあ、旗本には、腰抜けが多いといっているが」

「そんな事はない」

ブスケー大尉も横から、

「それは勝さんの思い違いです」

と口を入れた。

「さよですんしょうか」

「そうですとも。わたしの云う事に間違ひはありません」

「間違ひ、ありませんかねえ」

勝は、大隅守を見ながらにやにやした。

ブスケーは、伝習教官の中では一番日本語がよくつかえた。自分で治部輔などといった。維新後も横浜に留って、日本の女と結婚し元老院の雇となり、生涯を日本に送って、土となった。現在の役人の大礼服はこの人の考案だと伝えられる。

「ですから」

シャノワン少佐は、その癖か、右の肩を少し持ち上げるようにして、

「あなたに告げることがある」